平成23年（第56回）秋田県文化功労者

（年齢順）

保健衛生	（保健医療・地域医療の向上）	能登彰夫
美術・工芸	（天鷺ぜんまい織の復元・伝承）	髙野利津
技芸	（民謡の普及・発展）	本間良藏
民生・社会福祉	（福祉の充実・向上）	菅原三朗
文芸	（短歌の普及・発展）	齊藤博
農林業・漁業	（農業の振興・発展）	澁川喜一
産業	（食品産業の振興・発展）	秋田プリマ食品株式会社

保健医療・地域医療の向上

能登彰夫（のとあきお）

（84歳）

住所
秋田市

秋田県医師会において、昭和49年から２年間副会長に、昭和51年から平成２年までの14年間にわたり会長に就任し、卓越した指導力で県医師会をまとめ、秋田県の医学会に大きな足跡を残した。

この間、昭和50年から、県医師会の主催で、地域住民、医療担当者及び行政の三者が県民に開かれた医療を共に作るという立場で、医療問題を巡って隔意なく話し合うことを目的に「地域の医療を考える集い」を始めており、現在では全郡市医師会で開催されている。

また、県民皆検診の中心になっている「秋田県総合保健センター」の設立や、心疾患、消化器疾患に対する高次の救急医療を担う「秋田県成人病医療センター」の設立に中心的な立場で参画し、県民の健康増進、地域医療の連携整備、充実に大きな成果を挙げた。

このほか、秋田市医師会においては、理事（昭和37年から２年間）、会長（昭和47年から４年間）に就任し、昭和48年には地域の休日夜間の診療体制について対策協議会を組織して、昭和50年の「秋田市立休日応急診療所」の設置に尽力した。

天鷺ぜんまい織の復元・伝承

髙野利津（たかのりつ）

（82歳）

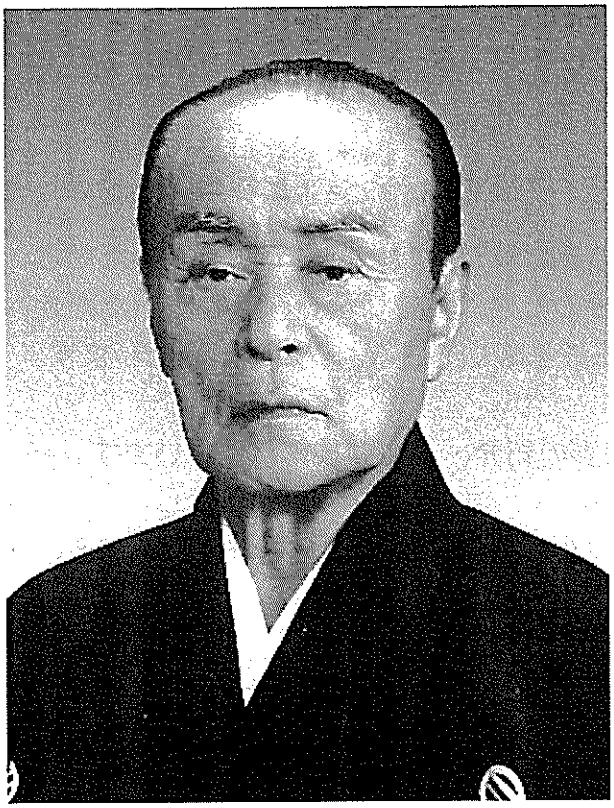
住所
由利本荘市

岩城町長から、亀田藩時代に普及伝習され明治時代に考案された「ぜんまいの白鳥織」の復元要請があり、昭和54年頃から「天鷺ぜんまい織」として伝統の絹の着尺（反物）の復元に貢献してきた。

史跡保存伝承の里「天鷺村」で制作・伝承活動を行うとともに、観光客や地域の子ども等を対象とした体験活動の受入れを行っている。

一方、秋田ふるさと村での作品展示や見本市、河北工芸展や日本工芸会東日本支部展など各種展覧会にも意欲的に出品し、入賞・入選を果たすなど高い評価を得るとともに、「天鷺ぜんまい織」の普及啓発活動に貢献している。

また、平成８年の秋田県工芸家協会入会以来、協会展では連続して受賞し、平成20年には「工芸大賞」に輝いた。協会の研修活動や運営にも積極的に取り組むなど、協会発展にも大いに尽力している。



民謡の普及・発展

本間良藏（ほんまりょうぞう）

（80歳）

住所
大館市

昭和26年、「ＮＨＫのど自慢」秋田県大会準優勝を契機に民謡を始める。その後、昭和40年、鳥井森鈴氏に師事し、本格的に民謡の修行に入る。

昭和46年、大館市を中心に民謡教室を立ち上げ、当時は300名を超える門下生を抱え、民謡指導者として活躍した。財団法人日本民謡協会主催の民謡全国大会における民謡日本一（内閣総理大臣賞）３名、年代別部門優勝（各大臣賞）11名を育て上げるなど、後継者の育成に尽力してきた。

一方、昭和46年から「大館市老荘大学」市民民謡講座の指導者を務めているほか、昭和50年から地元企業のバスガイド養成のための民謡指導を実施している。

また、大館市や観光協会、商工会などと連携し、地域の諸行事や祭典、社会福祉施設での芸能奉仕活動なども行っており、秋田県民謡界の発展のための功績は多大である。

福祉の充実・向上

すが　わら　さぶ　ろう
菅　原　三　朗

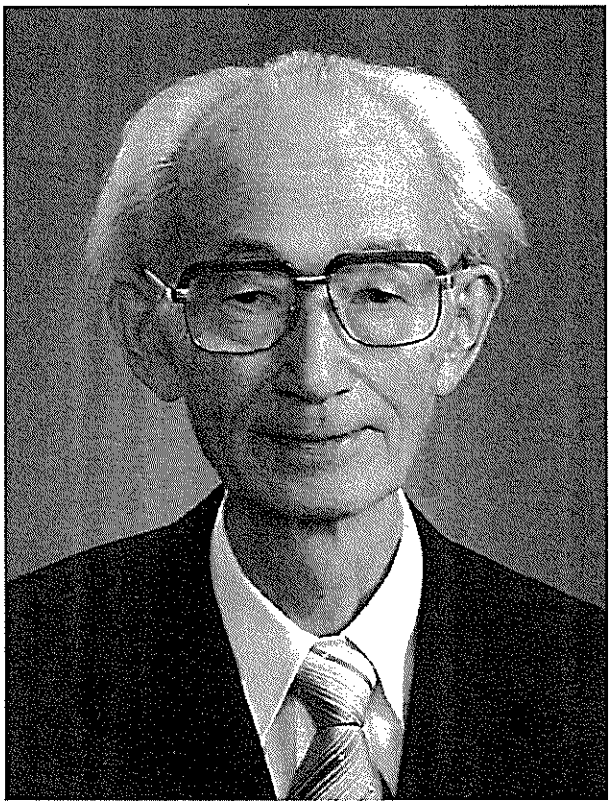
（80歳）

住所
潟上市

秋田県肢体不自由児協会長や社団法人全国肢体不自由児者父母の会連合会の理事、副会長として、勝平養護学校（現秋田きらり支援学校）の設立や同連合会全国大会の本県誘致など、本県及び全国の肢体不自由児者の療育・教育の充実向上、自立支援及び処遇の改善に尽力した。

また、昭和61年には、重度肢体不自由者の自立支援のため、本県民間第１号となる小規模通所授産施設「希望の家」（現「希望園」）を設立し、以後この運営に携わっているほか、昭和62年から平成21年まで昭和町及び潟上市の社会福祉協議会長を務めるなど、地域福祉の充実、発展に尽力してきた。

平成17年には、秋田県障害者スポーツ協会長に就任し、２年後に迫っていた第７回全国障害者スポーツ大会「秋田わか杉大会」の開催に向け、障害者スポーツ団体の育成や競技力の向上に積極的に取り組んだ。同大会では、本県選手団の団長として障害者関係団体の総力を結集し、過去最多となる124個のメダルを獲得して大会を成功に導いた。



短歌の普及・発展

齊藤　博（さいとう　ひろし）

（79歳）

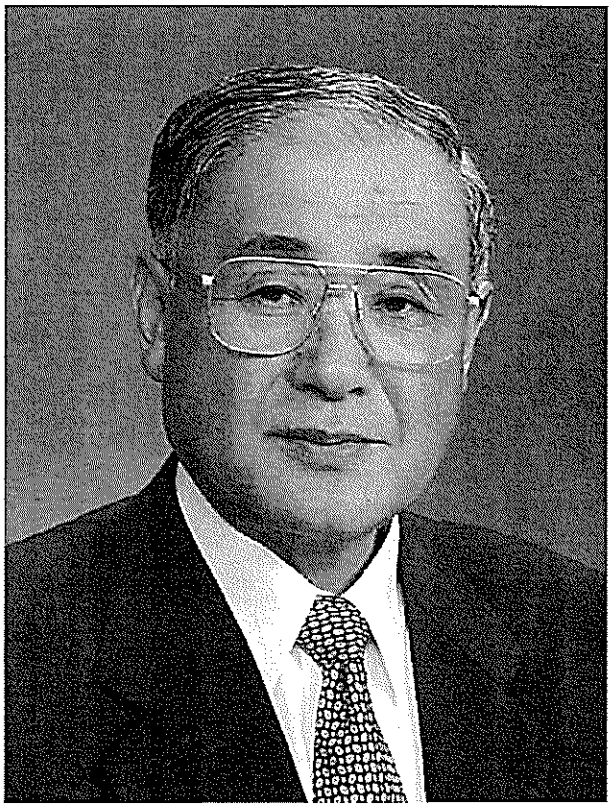
住所
秋田市

昭和31年から秋田県歌人懇話会幹事、事務局長を務め、平成９年から会長となる。同会は、平成20年、創立50周年記念事業として、秋田県における短歌の歴史、短歌会、歌人、歌誌、歌碑などの調査研究を収録した「新秋田県短歌史」を刊行し、公共図書館に寄贈した。同書により同会は、秋田市文化選奨を受賞している。

また、平成５年には、短歌雑誌「寒流」の編集責任者及び発行人となった。平成20年、「寒流」は60年間の活動が認められ、秋田県芸術選奨特別賞「ふるさと文化賞」を受賞している。

一方、秋田県の公募文芸「あきたの文芸」短歌の部の選者、秋田魁新報社読者文芸「短歌」の選者、全県短詩型文芸大会の選者等を務めるほか、地域歌会の育成にも努めるなど、県内短歌界の先頭に立ち、多くの歌人、歌会を育成し、レベルの向上を図ってきた。

平成20年からは秋田県芸術文化協会会長となり、芸術文化の普及発展や組織の強化にも努めている。



農業の振興・発展

澁川喜一（しぶかわ　き　いち）

（76歳）

住所
大仙市

昭和47年にＪＡ豊川組合長に就任し、昭和50年のＪＡ中仙町の誕生に大きく貢献するとともに、平成10年には、大曲市・仙北郡内20ＪＡの合併によりＪＡ秋田おばこを誕生させ、平成14年には、代表理事組合長として活躍した。

また、ＪＡ中仙町組合長時代から、西明寺地区とともに「秋田まごころホウレンソウ」のブランド化を図り、本県青果物のブランド化を先導するとともに、都民生協との消費者交流にいち早く取り組んだ。ＪＡ秋田おばこ組合長時は枝豆栽培を進め、現在県関係団体で進めている“めざせ枝豆日本一”の取組の中核となった。

平成２年にはＪＡ秋田中央会専務理事に就任し、秋田県等と連携して食味値データを活用した水稲管理マニュアルの作成に取り組んだ。また、在任期間中は12ケースのＪＡ合併を実現するとともに、現在のＪＡ体制の基となる「秋田県広域ＪＡ合併構想」を樹立した。

さらに、平成17年にはＪＡ秋田五連会長に就任し、翌年度の秋田県ＪＡ大会で決議した「地域農業を主体的に担う経営体の育成」に尽力するなど、本県農業の発展とＪＡ組織の強化に大きく貢献した。

食品産業の振興・発展

秋田プリマ食品株式会社（あきたしょくひんかぶしきがいしゃ）　（代表取締役社長　　丹羽　博和）

住所
由利本荘市

昭和36年、秋田県の要請に応じて、竹岸畜産工業株式会社（現プリマハム株式会社）秋田工場として本荘市に進出し、県の誘致企業第一号となる。以来50年間に渡り、地域の雇用を守り続けるとともに、地域経済の発展に寄与してきた。

平成14年、「秋田プリマ食品株式会社」となり、世界でもトップレベルの食品加工技術を活用し、「あきたこまち入りメンチカツ」「餅入り生つくね」等、先駆的な地域産品を開発して全国発売するなど、地域食品産業の振興に大きく貢献している。

また、近年では、県が進める食・農・観プロジェクトの由利地域における中心的企業として地元商工会や行政等に独自のプロジェクトを提唱し、自らも東京都にある秋田県のアンテナショップで「由利にウェルカム！モニターレストラン」を開設した。

地元で親しまれた「本荘ハムフライ」を復活させた市民有志の町おこし活動の支援や、子どもたちの食育活動へ尽力するなど、地域の産業振興や地域活性化に貢献してきた功績は多大である。